

在宅口腔ケア徐々に浸透

開設「介護・医療の協力カギ」 3年半

十勝歯科医師会(小林靖会長、192人)が、在宅の歯科医療相談や治療を組織的に展開する「在宅歯科医療連携室」を開設して3年半が過ぎた。相談件数自体は年々減少傾向にあるものの、会が大きき目的に掲げる誤嚥(ごえん)性肺炎予防など口腔(こうくう)ケアを目的とした利用が徐々に増えているという。小林会長は「口の健康は体と直結するという意識を、介護・医療担当者にいかに理解してもらうかが利用増のカギ」と話している。



帯広市内の85歳の男性宅を訪ねた同連携室所属の歯科衛生士渡辺トモ子さんは、男性に体調を聞きながら入れ歯の洗浄指導などを行った。脳梗塞になつて以降、リハビリを続けているという男性は今回が初めての依頼。同席したケアマネジャーの齋藤美沙枝さん(開西病院在宅ケアセンター)は「多少、口が濁き気味だったので、担当医の訪問しての事前相談は無料。ケアマネジャーの齋藤さん(中央)が見守る中、渡辺さん(右)が依頼者に義歯の洗浄指導を行う」

ドバイスで口腔ケアのチェックをしようことにした。リハビリは順調にきているが、自己歩行が難しいため(同連携室を)活用した」と話す。今後、病院で定期的に行われるリハビリ担当会議に参加していくという渡辺さんは「高齢者ほど、口腔ケアが体の調子に大きな影響を与える。こうして定期的ケアに関われる事例はまだ多くはないが、徐々に増えてきた」と話す。

同会は2012年10月、道内では初めて在宅歯科医療連携室を開設した。現在

は道の委託事業として実施し、会員の4割程度の歯科医が参加している。在宅歯科診療は従来、各歯科医院などの個別対応だったが、同連携室では渡辺さんら常駐する歯科衛生士の相談員が患者本人や家族、医療・介護関係者からの相談を一括で受けた後、事前訪問で口の状況や食事形態などを確認する。その上で、必要に応じ、訪問できる歯科医師を紹介し、訪問診療する仕組みだ。ただ、相談実績は減少傾向。年度別で見ると、開設年の12年度が41件。13年度は119件に伸びたが、14年度は92件、直近の15年度は80件にとどまった。小林会長は「高齢化が進む中、在宅の高齢者を中心に本来

十勝歯科医師会の在宅歯科医療連携室 自宅や施設、病院で療養などし、歯科通院が難しいという人が対象。歯科衛生士の事前訪問までは利用無料。歯科医師の訪問も、健康保険や介護保険の範囲内の内容のため、患者は一部の負担で済む。問い合わせは電話0155・25・2172(月～金曜の午前9時～午後5時)。

はもつとニーズがあるはずだ」とみる。同連携室によると、当初多かったのは義歯の調整や、ひどくなつてからの虫歯治療だが、今後力を入れていきたい分野は前述の男性のような、口腔ケアでの継続的な関わりだという。小林会長は「歯は命に関わらないなどとして、本人や家族はもちろん、医療福祉関係者ですら後回しにしがち。ただ、70歳以上の高齢者の死亡原因のトップは肺炎で、特に、唾液や口に残った食べかすと一緒に細菌が誤って気管に入る誤嚥性肺炎が圧倒的に多い。日頃のケアが重要な」と訴えている。

同連携室は近年、介護施設や高齢者サロンの研修会などの席上、介護関係者向けの講演会の開催などを通じて、口腔ケアの意義を積極的にPRしてきた。チラシを刷新した他、今秋に誤嚥性肺炎に関する講演会も計画している。小林会長は「無料で相談できるなど地域貢献の事業。今後も地道に啓発していきたい」としている。(佐藤いづみ)